

# 理論言語学の現代的課題 (Current Issues in Theoretical Linguistics)

## リレー講義のご案内

一般財団法人 ラボ国際交流センター

東京言語研究所

今年度から理論言語学講座の新たな開講形態として「リレー講義」を始めるとなりました。リレー講義では今後の言語研究にとって重要な視点や論点を提供することを目指して、その先進性によって、これまで開講されている理論言語学講座の通常講座や集中講義枠に収まりきらないような多様な研究領域におけるトピックを取り上げます。同時に、入門レベルの講義を終えた受講者にとっての先端的研究への橋渡し役を担うことももくろまれています。

日時：6月24日（土）、25日（日）、7月2日（日） 13:00～17:20 ※途中休憩有

講義形態：ZOOMによるオンライン講義

受講料：一般15,000円（消費税込）

理論言語学講座受講生 10,000円（消費税込）

※1日単位の申込受付は行っておりません。

申込期間：5月19日（金）10:00AM～6月19日（月）AM10:00

### 2023年6月24日（土）

#### 第1講義（13:00～15:00）

大津 由紀雄（関西大学）「講義の趣旨説明」

杉崎 鉦司（関西学院大学）「2023年度テーマ「言語間変異」に関する導入的概説」

#### 第2講義（15:20～17:20）

時崎 久夫（札幌大学）「音韻・形態・統語の言語間変異」

### 2023年6月25日（日）

#### 第3講義（13:00～15:00）

渡辺 明（東京大学）「移動の有無、ならびに語彙項目①」

#### 第4講義（15:20～17:20）

渡辺 明（東京大学）「移動の有無、ならびに語彙項目②」

### 2023年7月2日（日）

#### 第5講義（13:00～15:00）

今西 祐介（関西学院大学）「格配列システムの普遍性と多様性：能格型言語を中心に考える」

#### 第6講義（15:20～17:20）

杉崎 鉦司（関西学院大学）「言語間変異と母語獲得：wh不定詞節および焦点化詞を例として」

2023年6月24日(土)

[1] 第1講義(13:00~15:00)

(A) 講義の趣旨説明: 大津 由紀雄(関西大学)

1980年代以降、言語獲得研究を含めて比較統語論研究の目覚ましい研究成果が蓄積されている。21世紀の生成文法研究においてこれらの研究成果がどのように位置づけられ、説明されるかについて、ノーム・チョムスキーが断片的な提言を行ったり、暫定的な指針を示したりはしているが、いまだその全体像は解明の途上にある。本リレー講義では、世界の多様な言語の実証的な研究成果を踏まえて進展している比較統語論研究において、理論的に重要な研究課題を異なる側面から考察する。

(B) 2023年度テーマ「言語間変異」に関する導入的概説: 杉崎 鉦司(関西学院大学)

本リレー講義全体の理論的枠組みを成す生成文法理論の基本的仮説を概観するとともに、生成文法において言語間変異はどのように捉えられてきたのか、言語間変異と母語獲得はどのように関わりうるのかといった点について解説し、以降の講義の基盤となる知識を提供・確認する。

参考文献

Baker, Mark, C. 2001. *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar*. New York: Basic Books. / ベイカー・マーク・C(著) 郡司隆男(訳) 2010. 『言語のレシピー多様性にひそむ普遍性をもとめて』岩波現代文庫.

Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press. / チョムスキー・ノーム(著) 安井稔(訳) 1970. 『文法理論の諸相』研究社. / 2015. 50th anniversary edition with a new preface by the author.

Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press. / チョムスキー・ノーム(著) 外池滋生・大石正幸(監訳) 1998. 『ミニマリスト・プログラム』翔泳社. / 2015. 20th anniversary edition with a new preface by the author.

Chomsky, Noam. 2021. *Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go*. 『言語研究(Gengo Kenkyu)』160, 1-41.

Lasnik, Howard, and Juan Uriagereka. 2021. *Structure: Concepts, Consequences, Interactions*. Cambridge, MA: MIT Press.

大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則(監修)・杉崎鉦司・稲田俊一郎・磯部美和(編集) 2022. 『言語研究の世界 - 生成文法からのアプローチ』研究社. (特に第1章・第2章・終章)

## [2] 第2講義(15:20~17:20)

時崎 久夫(札幌大学)「音韻・形態・統語の言語間変異」

音韻・形態・統語の言語間変異を捉えるために、生成文法的研究では、チョムスキーの原理とパラメータの理論に基づき、それぞれの分野で様々なパラメータが提案されてきた。語や句の強勢位置のパラメータ、複合語の生産性に関するパラメータ、語順に関する主要部パラメータなどである。

一方、言語類型論では、グリーンバーグの研究などで、「A という特徴を持つ言語は、B という特徴も持つ」という含意的普遍性が提案されている (Greenberg 1963)。例えば、「後置詞を持つ言語は、属格-名詞という語順を持つ」というものである。さらには、「目的語-動詞の語順をとる言語は、形態が膠着的である」というような、分野にまたがる含意的普遍性も提案されており、全体的類型論という研究が行われてきた (Plank 1998)。

パラメータを各部門で多数仮定すれば、言語間変異を捉えることはできるが、子どもが言語を短期間で習得するという事実と整合しない。パラメータの相互関係とその背後にある仕組みを見つけることにより、言語間変異と言語習得の早さを同時に説明するのが本講義の目標である。

### 参考文献

Greenberg, Joseph H. 1966. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In Joseph. H. Greenberg, ed. *Universals of Language*, 73-113. Cambridge, MA: MIT Press.

Plank, Frans. 1998. The Co-variation of Phonology with Morphology and Syntax: A Hopeful History. *Linguistic Typology* 2, 195-230.

時崎 久夫. 2016. 「音韻論と全体的類型論」『現代音韻論の動向: 日本音韻論学会 20 周年記念論文集』 136-139. 開拓社.

時崎 久夫. 2021. 「形態論と強勢のインターフェイス」『形態論と言語学諸分野とのインターフェイス』西原哲雄 編「言語のインターフェイス・分野別 (テキスト) シリーズ」第3巻, 第3章, 71-103. 開拓社.

時崎久夫・岡崎正男. 2022. 『音韻論と他の部門とのインターフェイス』(最新英語学・言語学シリーズ第18巻)開拓社.

2023年6月25日(日)

## [3] 第3講義(13:00~15:00)

渡辺 明(東京大学)「移動の有無、ならびに語彙項目①」

## [4] 第4講義(15:20~17:20)

渡辺 明(東京大学)「移動の有無、ならびに語彙項目②」

この講義では、言語間変異の中でも、移動の有無(第3講義)と語彙項目の選択(第4講義)に関わる現象を取り上げる。Chomsky (2013)の提案では、移動の動機をラベルに関する構造上の要因に求めようとしているが、移動の有無が言語間変異の背後にあるとすると、移動が見られない場合は移動を動機付ける句構造要因が欠如していると言わざるを得ない。果たして構造の違いを根拠づけることはできるのか。1980年代に確立した移動のタイプに当てはまらないものとして、名詞や形容詞の投射内に見られるものを考察の対象として取り上げる。前者は日本語において数詞と分類詞が絡む語順を説明するために提案されたものだが、数詞が名詞と直接組み合わせられるときには観察されない。これは何を意味するのか。形態論に関わる原因が考えられるが、背景として個々の語彙項目の性格の違いが関与していることは間違いない。第4講義では、このような問題意識から、さらに固有名詞の言語間変異にまで話を進める。

## 参考文献

- Chomsky, Noam. 1992. Explaining Language Use. *Philosophical Topics* 20, 205–231. Reprinted as Ch. 2 of Chomsky, Noam. 2000. *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection. *Lingua* 130, 33–49.
- Moltmann, Friederike. 2023. Names, Light Nouns, and Countability. *Linguistic Inquiry* 54, 117–146.
- Watanabe, Akira. 2006. Functional Projections of Nominals in Japanese: Syntax of Classifiers. *Natural Language & Linguistic Theory* 24, 241–306.
- Watanabe, Akira. 2011. Adjectival Inflection and the Position of Measure Phrases. *Linguistic Inquiry* 42, 490–507.

2023年7月2日(日)

## [5] 第5講義(13:00~15:00)

今西 祐介(関西学院大学)「格配列システムの普遍性と多様性: 能格型言語を中心に考える」

本講義では、格配列システム、その中でも能格・絶対格型(以下、能格型)に関する理論的研究の変遷を概説する予定である。Dixon (1979, 1994)や Silverstein (1976)等の研究以来、能格型は言語類型論だけでなく理論言語学の分野においても注目されてきた。能格型はそれが持つ特異な格配列パタンのために、普遍文法の構築を目指す生成文法理論に多くの課題を投げかけている。

本講義においては、能格型言語の特異性を示すと同時に、英語や日本語といった馴染みのある言語と能格型言語の間に共通する諸特性にも着目しながら、言語の普遍性研究を詳説する。ジルバル語、バスク語、マヤ諸語、オーストロネシア諸語などの様々な語族に属する言語のデータを考察しながら、能格研究から見た生成文法理論研究の成果、問題、今後の展望について議論したいと思

う。また、能格型に関連する現象(名詞化や一致など)を併行して考察することにより、格配列システムの多様性を説明できるようなパラメータの可能性についても議論する予定である。

## 参考文献

- Aldridge, Edith. 2008. Generative Approaches to Ergativity. *Language and Linguistics Compass* 2(5), 966-995.
- Coon, Jessica, Diane Massam, and Lisa de Mena Travis, eds. 2017. *The Oxford Handbook of Ergativity*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, Robert, M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Imanishi, Yusuke. 2020. Parameterizing Split Ergativity in Mayan. *Natural Language & Linguistic Theory* 38, 151-200.
- 今西 祐介. 2020. 『言語の能格性』ひつじ書房
- Ura, Hiroyuki. 2001. Case. In Mark Baltin and Chris Collins, eds. *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, 334-373. Malden, MA: Blackwell Publishers.

## [6] 第6講義(15:20~17:20)

杉崎 鉦司(関西学院大学)

「言語間変異と母語獲得:wh 不定詞節および焦点化詞を例として」

母語獲得を支える生得的な機構が存在し、その中に言語間変異を司る制約(パラメータ)が含まれると仮定した場合、パラメータと母語獲得はどのように関わりうるだろうか。Snyder (2007)によると、パラメータに関する理論的提案から以下の3種類の予測が生じうる。

- (1) 言語現象 A と言語現象 B が同一のパラメータ値の固定から導かれ、かつそれらに必要な文法的知識が同一の場合、幼児は A と B を同時に獲得する。
- (2) 言語現象 A に必要なパラメータ値の固定および文法的知識が言語現象 B に必要なパラメータ値の固定および文法的知識の真部分集合をなす場合、幼児は A を B よりも先に獲得するか、A と B を同時に獲得する。
- (3) 言語現象 A と言語現象 B が同一のパラメータ値の固定から導かれ、A に関する肯定証拠が幼児に豊富に与えられている場合、(B に関する肯定証拠が欠如していたとしても)幼児は B を早期に獲得する。

本講義では、(2)の具体例として英語における wh 不定詞節の獲得を、(3)の具体例として否定文における焦点化詞(only や「だけ」)の解釈を取り上げて議論する。これらの母語獲得からの事実をもとに、パラメータの所在およびその必要性について考察する。

## 参考文献

- Sabel, Joachim. 2015. The Emergence of the Infinitival Left Periphery, *Proceedings of WCCFL 32*, 313-322.
- Shibata, Yoshiyuki. 2015. *Exploring Syntax from Interfaces*. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Snyder, William. 2007. *Child Language: The Parametric Approach*. Oxford: Oxford University Press.
- 杉崎 敏司. 2020. 「幼児日本語における作用域の反再構築化現象」 斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦・村杉恵子（編）『日本語研究から生成文法理論へ』110-126. 開拓社.
- Sugisaki, Koji. 2022. The Parameter of *Wh*-infinitives: A View from Child English. *Nanzan Linguistics* 17, 179-187.